

メッセージアウトライン ルツ記 1:1～2:2 「あなたの神は私の神です」

聖書ではルツ記の前に士師記がある。士師記はヨシュアの死から預言者サムエルが生まれる前までの約200年間の歴史を扱っている。この期間にはイスラエルの全国民を統一する政治的指導者も現れず、国民を統治する機構もできていなかった。また国の首都となる中心地もなく各部族は各々独立した行動をとる傾向があった。このような状況の中にある民に対して神は「さばきつかさ」(士師)と呼ばれる人々を立てられた。彼らは政治的、軍事的指導者であり、多くは戦士であった。しかし中には、女性もあり、祭司や預言者もいた。この時代のイスラエルはさばきつかさの活動を中心に展開されたのでこの書は「士師記」(ししき)と呼ばれている。

ヨシュア記が勝利の書と呼ばれるのに対して士師記は失敗の書と呼ばれる。なぜなら、イスラエルの民が主なる神に背き、カナン地の風習にならい、願い事の成就のために剣や槍で自分のからだを血を流すまで傷つけて、バアルなどの偶像の神を拝み、さらには自分の子を焼いて偶像の神に献げるなどの恐ろしい人身御供(ひとみごくう)と、男も女も姦淫などの不品行に走り、道徳的に墮落するという生き方を際限なく繰り返しているからである。そのパターンは、①イスラエルは滅ぼされずに残っていたカナン地の先住民と妥協して偶像礼拝と不道徳に陥る。②主なる真の神を異邦の民に証するという任務を放棄したイスラエルに対して神は異邦の民による圧迫、または隷属という方法でさばきを下される。③民は神にあわれみと助けを求めて叫ぶ。④神は民の祈りに答え、さばきつかさを遣わされる。⑤民はさばきつかさの存命中は神に忠実に仕えるが、彼が死ぬと再び背信の道をたどる。

それゆえ、この時代はイスラエル史の中でも最も暗い時代といえることができる。そのような暗い時代の中であって、闇夜の灯台のようにルツ記が展開される。時代は士師ギデオンのもとでの比較的平和であった時代と思われる。→士師記6-8章(BC1150年頃か)

[1-2]「さばきつかさが治めていたころ、この地に飢饉が起こった。そのため、ユダのベツレヘム出身のある人が妻と二人の息子を連れてモアブの野へ行き、そこに滞在することにした。その人の名はエリメレク、妻の名はナオミ、二人の息子の名はマフロンとキルヨンで、ユダのベツレヘム出身のエフラテ人であった。彼らはモアブの野へ行き、そこにとどまった」

ベツレヘムはヤコブの時代から存在した。→創世記35:19 モアブはアブラハムの甥ロトの姉妹から生まれ、広がった民族。→創世記19:30-38 彼らの地はユダ

部族の地と死海を挟んだ反対側(東側)にあった。夫の名はエリメレク(私の神は正しい王である)、妻の名はナオミ(快い)、長男の名はマフロン(病める者)、次男の名はキルヨン(消え失せる者) 子どもたちのこのような名は生まれた彼らの健康状態から両親によって名づけられたのであろう。正直かもしれないが、子どもたちのためにもっと良い名前を付けられなかったものだろうか。しかし、それが彼ら自身の運命を予告するものとなった。エフラテとはベツレヘムの別名で「穀物の地」の意。その地の住民はエフラテ人と呼ばれた。

[3-5]「するとナオミの夫エリメレクは死に、彼女と二人の息子が後に残された。二人の息子はモアブの女を妻に迎えた。一人の名はオルパで、もう一人の名はルツであった。彼らは約十年の間そこに住んだ。するとマフロンとキルヨンの二人もまた死に、ナオミは二人の息子と夫に先立たれて、後に残された」

二人の息子がモアブ人の女を妻に迎えたということから、彼らがベツレヘムへ帰る思いを捨てた

ということが感じられる。オルパは雌鹿、ルツは友情という意味。15節からオルパが弟嫁でルツは兄嫁であったということが分かる。

夫と子どもにも先立たれ、一人になってしまったイスラエルの女性にとって、それは社会的な死を意味する。

[6]「ナオミは嫁たちと連れ立って、モアブの野から帰ることにした。主が自分の民を顧みて、彼らにパンを下さった、とモアブの地で聞いたからである」

「主が自分の民を顧みて…」ナオミは主が故郷を顧みてくださって、再び繁栄の時 came ことを知った。一筋の希望の光である。それで彼女はベツレヘムへ帰ることにした。彼女はせめて故郷の地で葬られることを願ったのかもしれない。

[7-10] ナオミたちは今まで住んでいたモアブの地を出て、ユダのベツレヘムの地へ戻るために帰途についた。(7)「ナオミは二人の嫁に言った。『あなたたちは、それぞれ自分の母の家に帰りなさい。あなたたちが、亡くなった者たちと私にしてくれたように、主があなたたちに恵みを施して下さいますように。また、主が、あなたたちがそれぞれ、新しい夫の家で安らかに暮らせるようにして下さいますように。』そして二人に口づけしたので、彼女たちは声をあげて泣いた」(8-9)

ベツレヘムへの道中でナオミは二人の嫁を実家に帰そうとする。彼女たちが幸福な再婚ができるようにとのナオミの願いからである。しかし、彼女たちはこれを聞いて泣きながら、ナオミにあなたの民のところへ一緒に戻りますと言った。(10)

[11-13] ナオミは年をとった自分の現状を嫁たちに話す。自分はもう夫は持てない。たとえ今晚にでも夫を持って、息子たちを産んだとしても、息子たちが大きくなるまで待つというのか。それはいけないことであり、自分にとってとても辛いことである。

「主の御手が私に下ったのですから」(13)…ナオミは主のさばきが自分に下ったと

思っている。これは神の民であるイスラエル人の土地を離れて、異邦のモアブ人の地へ移住し、さらに息子たちが異邦人の嫁をもらったことがその原因だと思っているのかもしれない。

[14-15]「彼女たちはまた声をあげて泣いた。オルパは姑に別れの口づけをしたが、ルツは彼女にすがりついた。ナオミは言った。『ご覧なさい。あなたの弟嫁は、自分の民とその神々のところに帰って行きました。あなたも弟嫁の後について帰りなさい。』」

オルパはナオミのこたばに從って帰って行った。しかし、ルツは彼女にすがりついていた。

「ご覧なさい」とナオミが示す方向にはルツの懐かしい故郷モアブの地があり、弟嫁のオルパが帰っていく後姿が見える。そこには両親や友人たちがおり、再婚の幸福な生活が開けているかもしれない。一方、ナオミについて行くならば、見知らぬ異邦の地での悩みと孤独が待っているかもしれない。

[16-17]「ルツは言った。『お母さまを捨て、別れて帰るように、仕向けないでください。お母さまが行かれるところに私も行き、住まれるところに私も住みます。あなたの民は私の民、あなたの神は私の神です。あなたが死なれるところで私も死に、そこに葬られます。もし、死によってでも、私があなたから離れるようなことがあったら、主が幾重にも私を罰してくださるように。』」

ナオミが彼女を説得した理由は、この世的な幸福に関係するものであったが、ルツが固執したものはナオミとの人格関係と、この地上の幸福を超越したイスラエルの神、主との関係であった。

十年間のナオミとナオミの息子たちとの生活の間に、ルツはイスラエルの神、主を知り、主への確かな信仰を持つ者となっていたのであろう。

「あなたの民は私の民、あなたの神は私の神です。……私があなたから離れるようなことがあったら、主が幾重にも私を罰してくださるように」これはイスラエルの神、主に対する立派な信仰告白である。彼女の信仰は本物であった。夫に先立たれ、苦境の中にあっても、彼女は神と人にとり徹底的に従おうとしている。

姑ナオミも立派な信仰者であった。彼女は苦境の中でも、ひたすら嫁たちの幸せを願っている。

[18]「ナオミは、ルツが自分と一緒にいこうと固く決心しているのを見て、もうそれ以上は言わなかった」

ナオミはこれ以上ルツを説得することはできないと悟り、もうこのことに関しては口を開かなかった。

[19]「二人は旅をして、ベツレヘムへ着いた。彼女たちがベツレヘムへ着くと、町中が二人のことで騒ぎ出し、女たちは『まあ、ナオミではありませんか』と言った」

モアブからは死海に沿って北上し、ヨルダン川に下り、そこを渡ってエリコ方面へ上り、次に山地を死海に沿って南へ下り、エルサレムを通過して約10キロメートル進むとベツレヘムに着く。

ベツレヘムの人々はナオミのことを覚えていた。ベツレヘムは小さな町なので何か普段と違うことが起こるとすぐに伝わったのであろう。町中がモアブから帰った二人のことで騒ぎ出したのである。

[20-21]「ナオミは彼女たちに言った。『私をナオミと呼ばないで、マラと呼んでください。全能者が私を大きな苦しみにあわせたのですから。私は出て行く時は満ち足りていましたが、主は私を素手で帰されました。どうして私をナオミと呼ぶのですか。主が私を卑しくし、全能者が私を辛い目にあわせられたというのに。』」

「マラ」とは苦しみという意味。彼女は自分はイスラエルの神、主によって辛い目にあわされたと告白する。故郷のベツレヘムを出て、異邦のモアブに行ったが、その地での生活は楽なものではなかったのであろう。またそこでの夫の死とその後の息子たちの死は全能者のさばきと感じていたのであろう。それゆえナオミはベツレヘムの人々に自分のことをナオミではなく、マラと呼んでほしいと願う。主なる神を信じる信仰者であっても、しばしば大きな苦しみや逆境の中に置かれるとこのような心境になる。しかし、私たちは全知全能の神のご計画のすべてを知ることはできない。最悪と思われる出来事を通して主はご自分のご計画を進め、御栄光を現されることがある。→ヨブの苦難、パウロの宣教活動で受けた数々の苦難→ピリピ1:12他
主が最善をなさることを信じ続け、忍耐と希望をもって生きていくことが大切である。そしてちょうどよい時に、主は私たちの思いもよらない方法で引き上げてくださり、喜びを与えてくださるであらう。→ローマ5:1-5

[22]「こうして、ナオミは帰って来た。モアブの野から戻った嫁、モアブの女ルツと一緒にであった。ベツレヘムに着いたのは、大麦の刈り入れが始まった頃であった」

これは大麦の収穫期の初めの頃で今日の暦では四月ごろである。主のご計画の中でこの刈り入れ時が大きな意味を持つことが2章以下で分かってくる。

私たちもルツがナオミにすがりついて離れなかったように、苦しみや悲しみの中にあっても主なる神に信仰をもってすがりついて離れず、私たちに対する最善のみこころをなしていただく。